

『シカゴ』・『社会変化と政治の役割』の邦訳と C.E.メリアム研究の新視点

—日本メリアム学会（仮称）設立の提唱—

和田 宗 春*

Abstract

Charles Edward Merriam (1874-1953) is known as the father of modern political science. His particular contributions to the study of modern politics are due to two of his major achievements: development of political power theory based upon his own unique analysis and the establishment of the Chicago School of thought. This essay is a critique on Japanese translation of his publications: 'Chicago: A More Intimate View of Urban Politics' and 'The Role of Politics in Social Change', and calls for the establishment of Japan Merriam Society.

Key Words: C.E. Merriam, The study of modern politics, The establishment of Japan Merriam Society

I はじめに

1970年代の初頭から約30年間、地方政治の現場である議員をしながら、翻訳および文筆活動をしてきた。現在は文教学院大学非常勤講師であるが、『シカゴ』『社会変化と政治の役割』という、二冊のC.E.メリアム（以下メリアムとする）の原著を翻訳する過程では、地方議員であり市民であり全く学界から遠い存在であった。

そのような環境にありながら、どのような経緯で翻訳に取り組み、上梓する運びになったかについて以下に記し、さらに二訳書に関する政治学的な意義と、若干の政治学界批判について述べてみたい。

* 人間学部

日常の政治現象を語るとき、目の前を通り過ぎる情報を後追いついて理屈づけをしている場合が多い。今日のように情報化社会にあって商業情報化社会——視聴率＝スポンサー獲得——は純粋な情報をできるだけ面白おかしく素（もと）を変えない程度の加工をして提供することが当然となっている。スポーツ紙で一般紙の代替をする傾向が増えていることなどもそのよい例である。大衆迎合の時代である。それだけに現実、現況が優先されて原理、原則は省みられない風潮が続いている。その原理原則を説くべき政治学者も論文を発表したり、海外論文や著作を紹介したりして、政治学のレベルを上げるような努力をしない。新聞に筆をとったり、テレビに出演することで名を売るような安易な、評論活動をする学者が目立つのである。政治学者は本来諸説を立案したり、海外の諸説を翻訳して学徒や関心のある人々に、広く紹介することなどが主たる任務である。この作業をしっかりと行うことから政治学、政治学者の地位が固まってくるのである。

II メリアムとの出会いと『シカゴ』（1929年）⁽¹⁾ —1983年初訳・2006年改訳について

1960年代後半、論者は早稲田大学大学院政治学研究科において、故後藤一郎早大教授から政治学を学びつつ地方議員であった。メリアムの実績とりわけ『Political power』、『Non-voting』の解説を受け、現代権力論、世論調査を知ったのである。

当時、斉藤真、有賀弘両教授の労作である『政治権力』はまだ翻訳されていなかった。

ところで、学者が政治を研究し、論ずることは学問として当然であるが、同時に、政治家が、選ばれて国や地方自治体の政治に携わることも当然なことである。しかしながら、わが国では理論すなわち学者、実践すなわち政治家というように、かい離することを当然視する風潮がある。言い換えれば、政治というものが学問としての政治か、あるいは実際に携わる客体としての政治か、二分化して捉えられているということである。

さらに、現実政治は現実を動かしているという説得力のもとで、政治理論を超越した存在であった。学生として政治学を学び、地方議員として政治と関わる任務を果たしつつ、現実を理解しようと努力した。理論を現実にも現実を理論化するということに、相互に反映できないかという考えを持つようになっていった。その状況下で、メリアムに深い関心を持った主な理由は二点である。その一つはメリアムが学者である、と同時にシカゴ市議会議員であったこと、さらにシカゴ学派の創設者としての功績は、政治学史上金字塔を築いたといわれているということである。現職の地方議員であり同時に政治学者でもあった立場から、理論を実践に生かしているというメリアムは、当時の日本では存在しない人物像であった。メリアムの実績を検討することで、政治学と政治を融合させようと格闘してきた彼の足跡と、その内容も窺い知ることができるかもしれない、と考えた。

その後、メリアムについて調査、研究していく過程で『シカゴ』を知り、原著を入手した。

出版元のマクミラン社に照会し、著作権が消滅していることを確認し、重ねて日本語での出版の了解を得た。1983年に『シカゴ』を翻訳した際に、国際基督教大学教授、東京大学名誉教授である辻清明氏からいただいた「序に添えて」の一部を少し長くなるが、ここに引用したい。

彼の学問は、理論的知識と並んで経験的知識を重視した点である。そのために彼は壮年期の六年間をシカゴ市議会議員として現実政治の中で過ごすことになる。市政に対する直接参加というこうした経験は、政治学者としてのメリアムに二つの新しい研究分野を招くことになった。

一つは政策決定がいかなる手続きや慣行の中で行われているかを分析する政治過程論であり、他方は市政という舞台に登場する政治家群像の行動心理への強い関心である。

政治学におけるこの二つの分野の研究に先鞭を付けたことこそメリアムをしてアメリカの政治学の始祖たらしめた理由である。

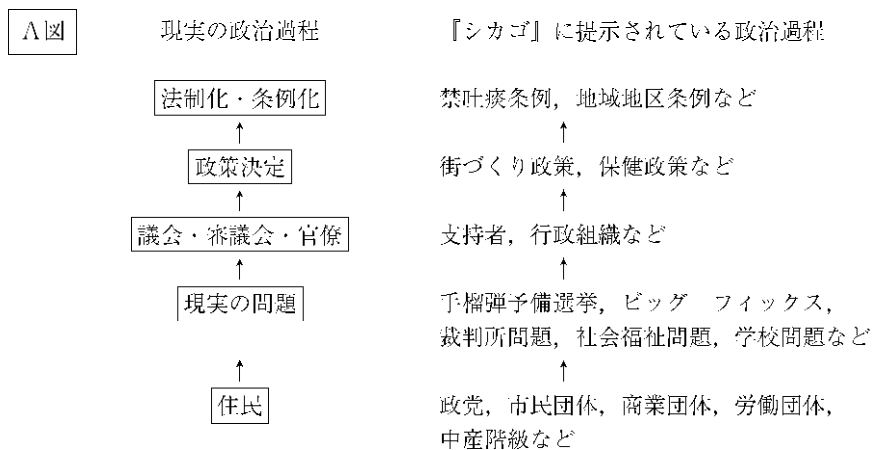
ここに訳された『シカゴ——大都市政治の臨床的観察』はメリアム政治学の原型とってよい。

——政治過程・『シカゴ』——

辻教授の指摘している政治過程論と政治家群像の行動心理は、理論よりも現実の直視に荷重した結果である。

現代においても一般に民意を生かし、政策決定から法制化にいたる政治過程はA図のように考えられる。これを『シカゴ』で具体的に提示されている政治過程と対比してみる。

『シカゴ』にあってメリアムは現実の問題として汚職を目的とする「ビッグ フィックス」を第二章で詳解し、これをシカゴの暗い面として、一方「シカゴを建設した人々」を明るい面の例として第三章で取り上げている。シカゴを、樂觀でも悲観でもなく、肯定でも否定でもなく、ありのままの現実として描いている。



どこの地方自治体にもある公式と非公式の統括組織である——「見える政府と見えざる政府」の有様なども直裁に記述している。また政党人脈の複雑な絡み合いを実名をあげているところは同種の本としては希有である。⁽²⁾

政策決定の受け手である官僚、審議会、議会の動きは第六章：シカゴの指導者に明示されている。

メリアムは当時のシカゴの現実を承知、理解する局面に出会って『シカゴ』を書いたことは事実である。ジェーン・アダムズの運営する世界的に有名な隣保施設であるハル・ハウスの実態や地方自治有権者連盟の民主化活動などの具体的な活動の紹介は、市民活動に深く理解を示している証である。

政治現場の側からみて政治学を「政治学はあくまで学問にすぎず」と言い捨てるだけの軽い存在とするならば、現実のみを前面に押し立てた理論のない、知的作業を許容しない閉鎖世界となる。政治学者には政治の現実である権力闘争およびそれに関わる組織、資金、人脈などそれぞれを直視しながらも分析、解析し、現実を腑分けしつつ、地域社会、国家ひいては世界の平和、安寧に近づける努力こそが求められるのである。

このような人間の営みこそが、王権神授説の現実から法の精神の醸成までの理論を辿る、政治学の理論であったはずである。

政治学を実学として捉えて、機能させようとしてきた近代政治学の流れの先頭に、メリアムは存在した。

少なくとも、メリアムの前後六年間にわたるシカゴ市議会議員の経験は、『シカゴ』をはじめ研究著作に生かされているし、ローリング²⁰といわれたアメリカ大都市の混沌を観察するときにも役立っているのである。

また2006年の改訳は初訳から二十三年が過ぎ絶版となっていて、研究者からの再販要請もあったからである。その機を生かして改めて原書に戻り当時の時代背景を生かして訳者注を入れ、写真家石元泰博氏の写真をお借りして視覚に訴える工夫もした。

III 『社会変化と政治の役割』（1936年）—1999年訳について

わが国の地方議会にあっては長期計画、中期計画、三カ年計画など都市改造、町づくりを時間を区切って行うことが条例化されてきていた。地方行政が場当たりの、また事後的に対応策を講ずることのないようにということである。例えば児童数の増加による公立保育園の増設計画、成人病予防についての保健計画など行政と計画は不即不離の関係となっていた。

国においても、かつて1960年の池田内閣の「所得倍増計画」などのように、国民を経済発展のために唱導する計画は国家運営の不可欠な条件となっていた。

そのようなときに、メリアムがドイツ滞在の6ヶ月間に資料もなく書き上げた『政治権力』

を、さらに具体的に発展させた著作としての『社会変化と政治の役割』に着目したのである。

『社会変化と政治の役割』は、メリアム自らがその序文で「ここで概観したことは筆者の一般的な経験と政府——特にフーバー大統領の社会傾向委員会、同じく全国資源調査会、社会科学研究所評議会の公務員検討委員会の各委員会——から受けた影響を基にしている」と記述しているように、本人の一般的な経験や政府との公的関わりから得た情報を消化しつつ書かれたことに注目した。

さらに重要視するのは、同じ序文において「私の著書『政治権力』で記した特定の側面や近い将来に本質的、建設的に研究されるべきいま勃興しつつある政治学や計画論を発展させたものといえよう。」といていることである。

申すまでもなく著作の章立ては主張の根幹である。あえて『政治権力』と『社会変化と政治の役割』の目次を次に掲げる。

『政治権力』

- 序章：問題の所在
- 第一章：権力の誕生
- 第二章：権力の一族
- 第三章：無法者の法
- 第四章：権力の表
- 第五章：権力の裏
- 第六章：権力の窮乏
- 第七章：権力の技術
- 第八章：自己放棄による権力
- 第九章：権力の病と死
- 第十章：現代権力の諸問題

『社会変化と政治の役割』

- 第一章：政府の排斥
- 第二章：政治の配置
- 第三章：厭世主義哲学と暴力行使
- 第四章：政治における保守と変化
- 第五章：戦略的管理
- 第六章：国家計画の本質

それぞれの目次から『政治権力』、『社会変化と政治の役割』の主張、視点が明瞭である。

『政治権力』は権力の誕生から暴力を含めた裏の権力と、政府などの表の権力やその限界や課題など権力にまつわる諸相を、形而上、形而下の両面から解析し、メリアムの権力論を立体的に構築することに成功している。当時、権力の表裏を強力に駆使したナチスが絶頂を極めるドイツ・ベルリンでの短期間滞在中に書かれたものである。その二年後の1936年に『社会変化と政治の役割』が本人のいうところの発展形として登場した。メリアムは『政治権力』の続編、第二部と考えていたのである。

『社会変化と政治の役割』は、政府について必要悪あるいは賛美するといった極端を分析する。さらに世界とともに変化を重ねていく国家における計画性を無意味という意見を紹介しつつ計画の妥当性を説いている。

旧来から国家というと計画などのない自由放任か、国家がすべて抑圧、指導する反動としての全体主義的な国民管理が主流であった。しかしメリアムは民意民主主義を取り入れながら、高圧的でない国家指導の計画を求めている。メリアム自身の第一次世界大戦の経験が大きく影

響していることは間違いない。

——メリアム・諸計画・シカゴ学派——

メリアムは国家計画の第一番の仕事は憲法制定であると説く⁽³⁾が、その憲法制定権が王権神授が正当化されていた世界では、国民の権利たりえなかった。特に民間人を登用して審議会、協議会などを重要視することによって国家計画に民主的な影響を与えようとする。これも現場からの体験的な着想であった。すなわち、1929年にフーバー大統領の「社会調査会委員会」の委員となった。さらにF.ローズヴェルト大統領の下で、1933年に「全国計画局」の委員をつとめている。ローズヴェルト大統領は、1933年5月第一次大戦中に立案されたまま放置されていたテネシー河流域の施設やダムをT.V.A.（テネシー河流域開発公社）として公的に管理してニューディール政策の目玉とした。その二年後の講演、三年後の出版である。「全国計画局」委員とT.V.A.計画との関係について、何らかの影響を受けたとみるのが順当であろう。

今日でも政府、地方政府などの内部に置かれる各種委員会や審議会は、当局の保有する信頼できる最高で最新の資料をもとに現状分析をし、将来の予測をし、対応策を進言、提言する。

また民間においても研究者、学者が集合して研究会などを組織し構成するいわゆるシンクタンクが普及している。今日からさかのぼること八十年以上前、二十世紀前半に、すなわちメリアムが四十代のころ、彼は1923年に社会科学評議会（Social Science Research Council）という政治学、経済学、社会学、心理学、人類学、歴史学の学際的な研究組織を創設している。

この民間組織、シンクタンクがそれまでの独立、孤立していた諸科学の壁を突き崩し横断的に研究協力することによって隣接領域が広がったのである。

これがシカゴ学派である。

IV 政治学界への若干の批判

C.E.メリアムといえば近代政治学の祖という形容がなされる政治学者である。その業績をみると、独自の政治権力論とシカゴ学派の確立に象徴されると解釈されている。⁽⁴⁾

とりわけ政治権力論においては、その著書『政治権力』にみられるような提起が、今日まで一つの立場を維持し、支持されてきている。

シカゴ学派については、シカゴ大学を基点として政治学、心理学、行政学、統計学などを協力させて今でいう隣接科学との協力の嚆矢となった学問交流の組織作りをしている。

この二つの業績だけでも一時代の学者としての力量は万人の認めるところである。

しかし、メリアムの思考したこと、また目標としたものは、現在評価されている二つの業績に止まるものではない。

現在、邦訳として入手できるメリアムの著作は六冊である。すなわち『アメリカ政治思想史

I・II』(1920年) 中谷義和訳、『政治学の新局面』(1925年) 中谷義和訳、『シカゴ』(1929年) 和田宗春訳、『政治権力上・下』(1934年) 齊藤真・有賀弘訳、『社会変化と政治の役割』(1936年) 和田宗春訳、『体系的政治学』(1945年) 木村剛輔訳・部分訳である。

—メリアム主要論文・分析—

メリアムの主要著作は次のとおりである。⁽⁵⁾

1900年の『ルソー以来の主権理論の歴史』から1945年の『体系的政治学』まで23の主要論文である。

〈C.E.メリアムの主要著作目録〉

- (1) *History the Theory of Sovereignty since Rousseau*. New York: Columbia University Press, 1900.
- (2) *A History of American Political Theories*. New York: Macmillan Co., 1903.
- (3) *Report of an Investigation of the Municipal Revenues of Chicago*. Chicago: City Club of Chicago, 1906.
- (4) *Primary Elections: A Study of the History and Tendencies of Primary Election Legislation*. Chicago: University of Chicago Press, 1908; rev. ed. (with Louise Overacker), 1928.
- (5) *American Political Ideas: Studies in the Development of American Political Thought, 1865-1917*. New York: Macmillan Co., 1920.
- (6) *The American Party System: An Introduction to the Study of Political Parties in the United States*. New York: Macmillan Co., 1922; rev. ed. (with Harold F. Gosnell), 1929; 3d ed. (with Harold F. Gosnell), 1940; 4th ed. (with H. F. Gosnell), 1949.
- (7) *A History of Political Theories, Recent Times: Essays on Contemporary Developments in Political Theory* (editor with Harry E. Barnes). New York: Macmillan Co., 1924.
- (8) *Non-voting: Causes and Methods of Control* (with Harold F. Gosnell). Chicago: University of Chicago Press, 1924.
- (9) *New Aspects of Politics*. Chicago: University of Chicago Press, 1925; 2d ed., 1931.
- (10) *Four American Party Leaders*. New York: Macmillan Co., 1926.
- (11) *Chicago: A More Intimate View of Urban Politics*. New York: Macmillan Co., 1929.
- (12) *The Making of Citizens: A Comparative Study of Methods of Civic Training*. Chicago: University of Chicago Press, 1931.
- (13) *The Written Constitution and the Unwritten Attitude*. New York: R. R. Smith, Inc., 1931.
- (14) *The Government of the Metropolitan Region of Chicago* (with Spencer D. Parratt and Albert Lepawsky). Chicago: University of Chicago Press, 1933.
- (15) *Civic Education in the United States*. New York: Charles Scribner's Sons, 1934.
- (16) *Political Power: Its Composition and Incidence*. New York: Whittlesey House, McGraw-Hill, 1934.
- (17) *The Role of Politics in Social Change*. New York: New York University Press, 1936.
- (18) *The New Democracy and the New Despotism*. New York: Whittlesey House, McGraw-Hill, 1939.
- (19) *Prologue to Politics*. Chicago: University of Chicago Press, 1939.
- (20) *On the Agenda of Democracy*. Cambridge: Harvard University Press, 1941.

- (21) *What Is Democracy?* Chicago: University of Chicago Press, 1941.
- (22) *Public and Private Government*. New Haven: Yale University Press, 1945.
- (23) *Systematic Politics*. Chicago: University of Chicago Press, 1945.
(木村剛輔訳, 体系的政治学 I, 鎌倉文庫, 1949年, はじめの部分の邦訳である).

論文を主たる課題別に分析すると, 次のようになる (数字は上記目録に表示された数字と附合させている)。

都市論……………	(3)	(11)	(14)		
政党論……………	(2)	(6)	(10)		
政治思想論……	(1)	(5)	(7)	(18)	(21)
政治権力論……	(13)	(16)	(23)		
政治過程論……	(11)	(17)	(20)	(22)	
選挙論……………	(4)	(8)			
政治隣接科学…	(9)	(12)	(15)		

この分析表からも論文の数, 領域, 傾向において『政治権力』の著者としてのメリアムに止まることはない。

後世の政治学者や関心を持つ者は, 一面の断層だけでその学者を規定し, 評価, 測定, 定量化してしまう傾向を厳に慎まなければならない。その学者の代表作としてある一つが特定されたとしても, 本人にとって研究対象となった課題はすべて「代表論文」としての意欲をもって著されたものと解すべきである。

例えば, 1924年の著作 (共著) である, 『Non-Voting』(棄権) は, 現実の政界において最大の政党になっている「支持政党なし層」の概念を研究している。

今日, 分極化している政治学が計量政治学としてまず投票行動に着目するとき, 本書の分け入った有権者の意識調査は, メリアムの極めて重要な実績としてあげなければならない。

また『政治学の新局面』で政治学の動向として政治教育, 成人の知性と政治的知恵の組織化の必要性を説いている。⁽⁶⁾ 今日の閉塞している民主主義再生の道として早急に着手すべき予言であった。

メリアムについていえば, 上記主要著作23冊のうち6著作が邦訳されているにすぎない。研究者はそれぞれ原書から知識を得ているのであろう。しかし学生を含め広くメリアムの仕事を知らうとする人々にとってまず邦訳を手にとるところからメリアムの理解が始まる。メリアムの正しい像を認識するためには, まずその資料たるべき著作を日本語で紹介するところから, もう一度メリアムを解剖していくべきである。

先にあげた主要著作が米国をはじめ海外で紹介され, メリアムを“現代政治学の祖”あるいはまた“政治学界の長老”と讃えていても, 邦訳が六冊しかないわが国の政治学者が同調できるのだろうか。

アメリカを含めた海外のメリアムの評価を、そのまま直輸入する安易さはとるべきではない。今までメリアム著作の完全邦訳を求めてこなかった、政治学界の怠慢といわれてもいたしかたない。たまたま政治学者の丸山真男氏が没後10年を迎え、代表的な著作である『日本政治思想史研究』以外の多様な丸山真男像が研究されつつある。荻部直東大教授などが意欲的であるといわれている。一、二冊の著作に止まらず、全体としての政治学者丸山真男像に光を当てようとするものだ。同様に政治学者メリアムにおいても関心のある研究者は『政治権力』とシカゴ学派の創設に止まらず幅広い彼の思想、行動を研究公表していく責務がある。

V まとめ

政治学を学ぼうとすれば政治学者を理解しなければならない。政治学者を理解しようとするればその論説を読まなければならない。

1973年に邦訳された『政治権力』がメリアムを語るときの代表的学説となっている。ミランダ、クレデンダというように、権力の象徴を分別したところが新鮮に映ったのかもしれない。たしかに、政治権力論としてみれば一つの形態を指示している。しかし、彼の他の著作もそれぞれ政治学の分野、領域の中では先駆的、啓蒙的な役目を負っている。またメリアム誕生から140年が過ぎ、彼の著作では予想しえなかった政治過程論や投票行動が現実となっている。

“政治学界の長老”といわれているメリアムの著作である『政治権力』だけをもって、メリアム政治学を特徴付けるわけにはいかない。そこでメリアムの学業に関心を持つ研究者が情報交換をし、それぞれの持つメリアム情報を共有し、公表する「日本メリアム学会」(仮称)の設立を提唱したい。

(注)

- (1) (数字) は原書発行年
- (2) 『自治の形成と市民——ピッツバーグ市政研究』 寄本勝美著 東京大学出版会 P369
- (3) 『社会変化と政治の役割』 和田宗春著 はる書房 P190
- (4) 『現代政治学の名著』 佐々木毅編 中公新書 P74
- (5) 『政治権力』 上 斉藤真・有賀弘訳 東京大学出版会 巻末
- (6) 『政治学の新局面』 中谷義和監訳・解説 三嶺書房 P161

(2006.12.14受理)